

アルフィーアス・ハーディーの系譜 ～祖父ジョシアの代から現代につながる子孫まで～

磯 英 夫

はじめに

創立者の新島襄とその後の同志社にとって大恩人であるハーディー夫妻や現代につながる子孫たちについて、これまで系統だった調査が行われてきただろうか。『新島襄全集』（第10巻 p.450）に掲載されているハーディー家系図には、注意書に「徹底した系図ではない」と断りがあるが、その後全面的に改訂されたという報告は見当たらない。ただ、若干の追加と訂正がなされた系図が、北垣宗治著「新島襄とアーモスト大学」（山口書店 1993 pp.435, 470）に掲載されている。同志社創立135周年に際し、「徹底した調査」結果をもとにハーディー家の系譜を明らかにしたいと思う。

主な参考文献は、1877年に発行された小冊子「ハーディー家百年の記録」（*A Record of One Hundred Years of the Hardy Family 1776-1876*）と1935年に刊行されたハーディー姓の系譜に関する調査報告書（*Hardy and Hardie, Past and Present* 1322ページ）である。

なお、新たに作成した家系図6種（夫妻の息子別系統図に再構成、添付資料1-6）と子孫や卒業大学などから入手した未公表の写真を本稿末尾で紹介する。

I ハーディー姓の系譜調査報告書 *Hardy and Hardie, Past and Present 1935*

著者H. Claude Hardyはその序文（p.iii）のなかで、情報収集に15年の歳月を費やしできるかぎり完璧で正確な情報提供を心掛けたこと、調査地域は本国アメリカのほかカナダ、イギリス、スコットランドにまでおよび、

大小を問わず多くの図書館ならびに系譜に関する公文書保管所を探索したことを告白している。おそらく、この書が現在入手できるハーディー家に関するもっとも詳しい系譜資料である。

情報提供者のなかに、ハーディー夫妻の孫Charles A. Hardy（四男 Edward Eldridgeの長男で新島は第2回欧米旅行の際に会っている）や曾孫Isabelle Ramsey Hardy（長男 Alpheus Holmesの孫）の名が謝辞とともに紹介されている。

本書は全17章立ての構成で、ハーディー姓の由来考察から始め、イギリス、アイルランド、スコットランドでの分布状態、アメリカの植民地時代から最初の国勢調査（1790年）までを俯瞰し、本書の中核として第7章から第16章までアメリカへ移り住んだハーディー姓の家族を系統別、地域別に詳しく報告、最終章を系統不明の家族に充てている。

ハーディー氏の系譜は、祖父Josiah Hardyから前出の孫Charles Ashley Hardyまでの5世代について、第12章（pp.321-337）に述べられている。同氏をこの系統のなかで最も傑出した人物として紹介、Neesima Shimetaとの関わりについても取り上げ、新島の生い立ちや（生年1843年を1842年と誤記）Wild Rover号による救出とその後の教育的援助、帰国後の同志社創立に対する貢献などにも言及している。

II アルフィーアス・ハーディーのルーツ

これまでハーディー氏がマサチューセッツ州チャタム出身であることは判明していた。だが、祖先がどこの出身かは不明であった。*Hardy and Hardie*（pp.93, 321）によると、祖父Josiah Hardy（ca1750-86）は1776年ヴァージニア州ノーフォークから移住したとある。

では、なぜ船長のJosiahは州内でもっとも繁栄していた港町ノーフォークから漁村チャタムへ移住したのか。アメリカが独立宣言する半年前の1776年元旦、貿易の要衝であったノーフォークはイギリス海軍から壊滅的な砲撃を受ける。混乱のなか自軍兵士などの略奪や放火なども相次ぎ町の5分の4を焼失。ノーフォーク議会はイギリス軍の上陸占拠を阻止するた

め、自ら焼け残った家々に火を放つことを決定した。(Norfolk Historical Society, *Norfolk's Worst Nightmare*)

家を失った人々のなかには西へ移住する家族、危険を冒し海を北に向かう家族とが現れた。Josiah Hardy船長は家族や知人とともに大西洋を北へ、まだ小さな漁村にすぎなかったチャタムへたどり着く。1778年、一緒に移住したNathaniel Hamiltonの娘Rebeccaと結婚。しかし、1786年12月15日、ボストンへ向かっていた Josiahの船がCape Cod沖で難破、乗組員とともに不慮の死をとげてしまう。享年36歳。このとき末娘はまだ7ヶ月の乳飲み子であった。妻のRebecca Hamilton (?-1795)は、両親の家にもどり4人の子供を立派に育てあげた。娘2人をそれぞれ船長へ嫁がせ、2人の息子はともに船乗りから船長になった。そのひとりがハーディー氏の父親Isaac Hardy (1782-1846)である。

父Isaacは1782年8月14日チャタム生まれ、22歳のとき17歳のBetsey Eldridge (1787-1856)と結婚する。4歳で父を失った寂しさからか、年子をふくめ男女6人ずつ12人の子供のいる大家族となった。その5番目がハーディー氏である。

Isaacは沿岸取引の船長をしていたが、やがて陸で事業をはじめた。当時チャタム随一の富豪Richard Searsとの共同経営ではあったが、南東部のチャタム灯台近くに製塩所と雑貨店を開いた。19世紀に入りにかに塩の需要が急増したためである。漁獲量の増加（魚の保存には塩が必須）や州政府の輸出奨励もあって、製塩業はCape Cod全域で最大の産業となった。1837年チャタムの製塩所は80に増え、年間の生産量は27,400ブッシェルに達した。(History of Barnstable County, Massachusetts, Town of Chatham, pp.145, 584, 597)

Ⅲ アルフィーアス・ハーディー Alpheus Hardy (1815-1887)

ハーディー氏は1815年11月1日、12人兄弟姉妹の5番目の子として生まれた。12歳で父親の雑貨店を手伝いながら、弟や妹の面倒をみななければならなかった。子沢山の一家は決して裕福ではなかったろう。当時チャタム

にはまだTown Houseがなかったから、店が人々の集まる社交場になっていた。長い航海から帰った船長や船乗りもおり、閉ざされた漁村では経験できない異国の土産話しが少年Alpheusの心をとらえた。

9歳のとき2歳の妹Lucinaが病死、その前年には従兄のJosiahがボストン港で溺死、10代の終わりには可愛がっていた5歳の末の妹Rebeccaを亡くしている、16歳のとき意を決してボストンに移り、しばらく食料品店で働くが足に大けがをして仕事をやめた。

その後、牧師になることを夢見てフィリップス・アカデミーに入学する。しかし、猛勉強のため健康を損ないやむなく中途退学を強いられる。その時の悲嘆がどれほど大きかったか、個人的なことを語るのを避けていた氏が初めて自らの言葉で告白する。

それは1857年42歳の夏のことであった。Amherst Collegeの学生に請われ初めて明かした真相である。牧師への道を絶たれた悲嘆のあまり、時の経つのもわずれ床に倒れこんでいたAlpheusの心に一筋の光が射してくる。「何か事業を起こすことで説教や礼拝と同じように神に仕えることができるのではないか。神のために金銭を稼ぐことが私の神聖な天職かもしれない。」

“I could serve God in business with the same devotion as in preaching and to make money for God might be my sacred calling.” (*Wisconsin Evangel*, August 1893)

少年時代に海の男たちに囲まれながらチャタムの海を眺め異国への好奇心を育んだ若者は、次のステップへ歩み始める。傷心の気持ちを癒すため3ヶ月ほど船で働き、19歳でJohn A. McGawの会社に雇われる。Alpheusはこのスコットランド人の熱心な長老会派の信者から、少なからず影響を受けた。1838年1月9日、23歳でボストンのCharles Holmesの娘Susan Warner Holmes21歳と結婚、4人の息子に恵まれる。だが、息子たちに自分の夢であった牧師への道を強制することはなかった。

人々との幸運な出会いや事業への不断の努力のおかげで、ボストンでも成功した実業家のひとりとして認知されてゆく。かつて牧師を目指した氏は、宗教組織、慈善団体、教育機関等にすすんで寄付を行い、多忙のな

か各組織の要職を引きうけ協力することを惜しまなかった。新島がアメリカン・ボードを通じて生活費や同志社への送金を欠かさず受けとることができたのも、氏の尽力に追うところが大きい。

1887年8月7日、72歳のとき不慮の怪我がもとで逝去。このとき、真っ先にボストンから危篤を知らせる電報を送った人物が、新島旧邸の建築に資金を寄せたJ. Montgomery Searsであった。なお、リサーチの過程でSearsの曾孫Sheila Daleyを見つけ、当時の貴重な家族写真4枚を同志社に寄贈していただいた。(添付写真)

ハーディー氏のこのほかの経歴については、井上勝也著『新島襄 人と思想』晃洋書房1990に詳しく報告されている。(第3章 新島襄の恩人ハーディー 人と生涯、pp.61-78)

なお、ハーディー夫妻の眠るケンブリッジのMount Auburn Cemeteryは同著者によって初めて発見された。また、同墓地に四男Edward Eldridge系統の子孫が多く埋葬されていることを確認したのは、Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*の翻訳でも知られる北垣宗治名誉教授である。(北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1993、pp.468-471 ハーディー家の墓)

IV アルフィーアス・ハーディー海運商事会社 Alpheus Hardy & Co.

ハーディー氏は自社の利益ばかりを追求していたわけではなく、つねに公共の利益を考えていた。1863年、大西洋沿岸に多発する海賊船の略奪が州の漁獲量を著しく減少させていたため、時の海軍長官Gideon Wellesに沿岸警備船の緊急出動を要請している。また、大西洋定期航路を整備するための予算措置に関する法案の成立に向け、政府に陳情した委員会にも名をつらねている。

会社が軌道に乗りはじめ業績が伸びるにつれ、つぎつぎに快速艇を購入していく。わずか150トンのOtho号に始まりつごう18隻の帆船を所有した。1845年11月20日30歳のとき、エジプトとパレスチナに向かう途中ジブラルタルから送った妻への手紙にはこうある。「ボストンを出航してから

航海は順調に続いている。新しい船も乗組員も素晴らしく、会社がこの船を購入したことは正しかった。自分の持ち船で大海原を走り積荷はすべて私の管理下にある。この現実私に私の心は誇らしさでいっぱいだ。人間とはなんと単純な生き物なのだろう。」

所有船18隻（詳細は添付資料-7）の名称は以下のとおりである。

1 Otho (150t), 2 Conquest, 3 Ocean Pearl, 4 Cowper, 5 Granite, 6 Wild Rover (1035t), 7 Young Greek (462t), 8 Mountain Wave, 9 Kepler, 10 Cleber, 11 Gazelle, 12 Turk, 13 Bounding Billow, 14 Daniel Webster, 15 Dorchester, 16 Young Turk (320t), 17 Young Turk, 2nd, 18 Radiant (以上 *Some Merchants and Sea Captains of Old Boston* 1918 p.24 および *Other Merchants and Sea Captains of Old Boston* 1919 p.58 いずれも初版)

実は、Wild Rover号をボストンから上海まで運んだのはテイラー船長ではなかった。弟の船長シメオン (Cap. Simeon Taylor) であった。テイラー船長が上海まで操船してきた船はYoung Greek号 (462トン) で、ハーディー氏から売却の命をうけていた。さらに、売却後は弟を上海に残しWild Rover号 (1035トン) に乗り換えボストンに戻る手はずであった。ここに新島の幸運のひとつが潜んでいたのではないか。セイヴォリー船長の紹介があったとはいえ、テイラー船長が倍以上のトン数のWild Rover号を安全にボストンへ運航するには、上海で船員たちを大幅に増員する必要があった。幸い新島もキャビン・ボーイとして乗船を許される。(Chatham Sea Captains in the Age of Sail 2008 初版、p118)

V ハーディー夫人

Susan Warner Holmes=Mrs. Alpheus Hardy (1817-1904)

Susan Warner Holmesは1817年ボストンで生まれた。父親は1820年代から東インド諸島と貿易をしていた Holmes & Chandler社の経営者の Charles McCaulley Holmes (1767-1845)、母親はSusan White (1777-1856)である。1838年21歳のときハーディー氏と結婚、4人の息子を授かる。若いころは夫の船にのり一緒にヨーロッパや中近東まで出かけることもあつ

た。エジプトを訪れたとき、広大な砂漠を馬で横断したというから活発な面も備えていたのだろう。

キリスト教の熱心な信者で、ボストンでは女性の慈善活動家としてパイオニア的存在であった。19世紀にはいると地方の若者たちが職をもとめ大都市へ殺到するようになる。ボストンの路上にも仕事のない若者があふれ、飲酒にからむ暴力沙汰や強盗、売春などが横行し、とくにRutland通りには若い女性放浪者がたむろして深刻な社会問題となった。ハーディー夫人は「若い女性を救う会」を立ち上げ、会長として救済に尽力している。また、運よく仕事が見つかった者でも条件は劣悪で、1日12時間、週6日の労働があたりまえであった。そうした青年を救うため、1851年12月アメリカで初めてのYMCAがボストンに設立された。夫人は真っ先に1000ドルの寄付をしている。ちなみに、YWCA設立は11年後の1866年まで待たなければならなかった。さらに、夫がハワイへの伝道船Morning Star号（都合4隻）の建造に協力した縁で、ハワイ国王を自宅で接待したこともあった。

同志社英学校開校の翌年1876年、アメリカ建国100周年を祝いアメリカン・ボードの京都ホームへアメリカ各地の宗教団体や個人から寄付金がよせられた。100ドル以上の高額寄付者のなかにハーディー夫人の名が見える。

1904年8月21日、メイン州のバー・ハーバーで逝去。享年87歳。前年10月、愛息Edwardを失い、年明け3月には孫のFanny（Edwardの娘）を亡くしたばかりであった。死亡を知らせる新聞には、夫人の慈善事業に関する業績や夫妻で新島を援助したこと、新島から送られた「ハーディー夫人菊」のことなどが報じられている。（Boston Evening Transcript, August 22, 1904）

Ⅵ ハーディー夫人菊 Mrs. Alpheus Hardy chrysanthemum

同志社には一枚の菊の写真が遺されている。「ハーディー菊」と呼ばれるその写真にどのような歴史が隠されているのか長い間不明であった。幸

い、故末光力作教授が「新島襄と植物」という小論のなかでわずか20行だがその菊について触れていることを知った。(北垣宗治編『新島襄の世界 永眠百年の時点から』晃洋書房 1990 pp.185-187)

さらに調査を続けたところ、興味深い経緯があることが判明した。本稿ではスペースの関係上詳しく説明することはできないが、新島がハーディー夫人に送った菊の一種が、アメリカ各地の菊品評会で最優秀を獲得したたく間に人気の的となっていく。評判はアメリカにとどまらず、ロンドンの品評会でも1位をとり、オーストラリア、ニュージーランドの新聞には菊の紹介とともに新島の経歴やハーディー夫人との関係が詳しく紹介されている。(詳細は別稿で報告するが、現在は同志社校友会サイトの筆者の講演記事「新島襄とハーディー夫人白菊」“The Doshisha Times” 2010年03月15日 第653号を参照)

Ⅶ 長男アルフィーアス・ホームズ Alpheus Holmes (1840-1917)

1840年3月14日ボストンに生まれる。1862年(実際は1863年?)8月26日、Dorchester出身のCharles Sumner船長の娘Mary Caroline Sumner(1841-?)と結婚、6人の子宝に恵まれた。大学進学のためTower's Latin SchoolとPhillips Academyに学び、すぐにHarvard University(当時の肖像写真を入手)に進学、1861年に卒業している。同級生に母校Phillips Academyの図書館に名が冠せられた詩人のOliver Wendell Holmesの息子がいた。息子は同名Juniorを名のりのちに連邦最高裁の判事をつとめた人物だが、二人は1911年のハーヴァード大学卒業50周年記念の集いで再会している。

卒業1年にして南北戦争に志願兵として参戦、兵役記録によると1862年5月26日入隊、1863年7月7日除隊となっている。(当時の写真入手)1年1ヶ月の間、第145マサチューセッツ志願歩兵部隊で陸軍中尉として任務を遂行、退役後、父親の会社Alpheus Hardy & Co.に入り、新島帰国の1年前1873年には33歳で代表に就任している。

ボストンの各種経済団体の要職を務めたほか、成人盲目者保護委員会の

会員にも名を連ねている。教育関連では1886年に母校Phillips Academyの理事に就任、89年には財務担当理事に任命された。1904年、Wellesley Collegeの財務担当理事も務めていた関係だろうか、ハーディー夫人の遺言にしたがい父親の遺品である等身大の大理石像（新島も好んで鑑賞）“The Wise and Foolish Virgins”を同校に寄贈している。（添付資料- 8）

晩年、貧しい子供たちが多く通うボストン公立学校で実業教育（料理、裁縫、木工）をはじめたときに運営資金を提供したり、マサチューセッツ軍歴史協会のメンバーとして、南北戦争に関する回顧録の出版に一文を寄せている。

子供は男女3人ずつ、1 Alpheus Sumner (1864-1946), 2 Susan White (1867-1920), 3 Eleanor (1869-1953), 4 Phillip Winslow (1874-1887), 5 Mary Caroline (1877-?), 6 Roger Sumner (1879-?) である。

全集記載の長男の誕生年について、北垣宗治名誉教授から1864年の間違いであるとの情報をいただいた。*Hardy and Hardie*にもそのように記載されており、除隊が1863年7月7日であることを考えるとその方が自然である。結婚も兵役中とは考えにくく、1862年ではなく1863年の8月26日と訂正すべきだろう。このうち、長男Alpheus Sumnerと次女Eleanorの子孫それぞれ2名と連絡がとれている。

Ⅷ 二男チャールズ・フランシス Charles Francis (1843-1911)

*Hardy and Hardie*には誕生日と結婚相手2人の情報のほか子供の記載はない。新島全集記載のスペルFrancesはFrancisの間違いで、死亡日は1911年3月4日ニューヨークと判明した。（New York Times, March 5, 1911）最初の結婚相手は、1875年6月13日32歳でケンブリッジのRobert Fullerの娘Georgiana、再婚相手は時期不明だがHelen Failey。

1861年のボストン人名録によると、Charlesは18歳ですでに父親の会社で働いていた。一方、兄はまだ大学生とある。二人の住所は自宅の4 Joy (St.)、Charlesは大学へ進学しなかったのか。さらに、1865年、1875年の人名録でも依然として父親の会社（1873年に会社名義は長男に譲られた）

に籍をおいている。

1878から80年のニューヨーク港の海運情報には、すでに Charles F. Hardy & Co.社がチャーターした船の名が見える。また、1882年2月16日付けNew York Timesには次のような記事が掲載されている。「Charles Hardy氏は、信用度が高くまた影響力、資金力のある肉親に恵まれている。父親は国内最大の果実類輸入業者のひとりボストンのAlpheus Hardy氏。同氏はすでに1876年11月（1873年の間違い）に引退しているが、息子であるCharles Hardy氏が当地ニューヨークで輸出入業を受け継いでおり、兄もボストンで同様の会社を経営している。」Charlesは独立を果たし立派に会社経営に成功していた。

ユニオン・クラブ・リーグ（有力政治家や経済人の集まり）や各種経済団体の役員としても活躍、1886年8月27日の新聞記事には、ペンシルバニア州の高級リゾート地の会員として夫妻の名が見え、エピソードに妻のほうがマス釣りの名人であったと紹介されている。晩年1万ドルの山荘を購入した大金持ちとして報じられた。（New York Times archives）

IX 三男アーサー・シャーバーン Arthur Sherburne (1847-1930)

1847年8月13日、マサチューセッツ州アンドーヴァーに生まれる。少年時代、父親の船団をボストン港へ迎えに行ったとき、水平線のはるか向こうの見知らぬ世界から少しずつ近づいてくる帆船を眺めているうちに、突然次のような感情に襲われる。

“first desire to break the bondage of love and escape the monotony of mere food and raiment” 「愛情あふれる肉親との関係も断ち切って、衣食だけに固執するこの退屈な日常から抜け出したい」二人の兄とは違って、何かビジネス世界とは異なる生き方に惹かれていくArthurの心のありようが垣間見える。

1869年7月1日22歳で、Henry Woodの娘Katherine Perley (1845-1914)と結婚、二人の息子を授かる。1898年3月9日、50歳をすぎたギリシャ大使のとき、ニューヨーク出身のHenry C. Bowenの娘Grace Aspinwallとア

テネで再婚した。最初の妻との間に生まれたSherburne (1870-75) は5歳で夭折、その年生まれの次男Thornton Sherburne (1875-1937) の系列だけが現在につながっている。

Phillips Academyを卒業後Amherst Collegeに入学したが1年足らずで違和感を覚え、1865年に逃げるようにしてウェストポイント陸軍士官学校に入学する。在学中は射撃の名手として認められるいっぽう聖歌隊やスピーチなどで活躍するなど文武両道の才をみせ優秀な成績で1869年に卒業した。(当時の写真入手)その後、母校教師、技師、大学教授、作家、外交官などとさまざまな分野で活躍したため、兄弟のなかでは最も名声を博した人物と見なされている。

1930年3月14日、コネティカット州ウッドストックで逝去。享年83歳。

1965年、孫のGelstonが同志社を訪れ、遺品のサーベルと軍用毛布の一部を寄贈している。なお、さらなる詳しい情報は、北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』第3章A.S. ハーディー『新島襄の生涯と手紙』（訳者あとがき pp.434-442）に報告されている。

余談であるが、最初の妻Katherine Perley Woodの祖先をたどると意外な事実に出会った。曾祖父のMatthew Thornton (1714-1803) がニューハンプシャー州の代議員として、John Hancockが最初に署名したアメリカ独立宣言書に名を連ねていた。そのため夫妻は息子の名前をThorntonと名づけたのだろう。現在、その子孫とも交流している。

X 四男エドワード・エルドリッジ Edward Eldridge (1850-1903)

新島全集の家系図では誕生を1853年としているが1850年の間違いであった。また前述の『新島襄とアーモスト大学』p.435に掲載の系図では死亡を1930年としているが、これは単純な誤植であろう。

1850年10月17日ボストンに生まれる。初期の教育はドイツ南西部のシュトゥットガルトで受けたが、1870年のマサチューセッツ農科大学選科の学生簿にEdwardの名が見える。(選科22名、全学生数147名、マサチューセッツ大学アマースト校提供) *Hardy and Hardie* p.333には卒業とあるが

年代は不明である。しかし、この年は新島がAmherst大学を卒業した年であるから、2人はAmherstの町のどこかで会っていたかもしれない。また、William S. Clark (1826-1886) が在任中であったので、Clarkはかつての教え子新島についてEdwardに尋ねたとも推測できる。

彼が農科大学を選んだ理由は、卒業して西部に移り「科学的な」方法で農場を経営することにあつた。しかし、1873年に結婚した2歳年上の新妻Elizabeth Randolph Bates (1848-1910) の反対であえなく夢は消えてしまう。彼女は育ちがよく教養も高かったが繊細な神経の持ち主で病気がちであったから、未開の西部での暮らしには不向きであった。

結局、23歳の若さで1872年のボストン大火により関心が高まったと言われる保険業に入ることを決意、父親や兄たちの支援（当初 31 Sears buildingのオフィスに同居）も受けながら、仕事量もしだいに増え成功していくことになる。

生来アウトドアの活動を好み、余暇には狩猟や乗馬を楽しんだ。また、ドイツで覚えたフェンシングも得意で、ドイツ人の御者や召使いを相手に試合をしていたという。後年はニュートン市の西部Auburndaleに住み、市の病院や教育委員会の役員を務めるかたわら、公立学校建設の資金を提供する余裕もできた。市民がその学校にEdward Hardyの名前を冠したいと申し出たときには丁重に断っている。

音楽をこよなく愛し、ボストン交響楽団のコンサートへしばしば通っていた。自らも作曲を手掛け、その一曲が兄のArthurにより歌詞がつけられ自分の葬儀で演奏されたという。1903年10月12日逝去、享年53歳。兄弟のなかでは一番の若死のうえ、7ヶ月前には娘Nellieを出産事故で亡くしていた。翌年8月、母親のハーディー夫人が追うように他界している。子供は長男Charles Ashley Hardy (1874-1929)、二男は1876年生まれでその日に死亡、長女 Fanny “Nellie” Bates (1879-1903) の3人であった。

新島はこの2人の幼年時代に会い、1885年6月5日の英文日記に印象を記している。

“Mrs. Ed. Hardy’s children are very pretty. Charles is serious & Nellie is mischievously bright & cunning. M. Ed. has a fine convenient house.”

「エドワード・ハーディー夫人の子供たちはとてもかわいらしい。チャールズは生真面目で、ネリー（子孫によるとあだ名）はお茶目だが頭がよくてかわいい。エドワード氏はすばらしく便利な家を持っている。」

XI 長男系の孫アルフィーアス・サムナー Alpheus Sumner (1864-1943)

1864年10月6日、インドのボンベイ（現ムンバイ）に生まれる。父親の Alpheus Holmesと同じようにハーヴァード大学出身で、1887年に卒業している。父親の会社には入らず、人生の大半をゴム事業に従事した。はじめ中央アメリカへ調査に出かけ、1910年にはジャバにゴム会社を創業。マレー半島、ジャバ、ボルネオなどのプランテーション栽培に投資、この事業が莫大な利益をもたらす。当時ゴムの木栽培は不可能と考えられていたが、この成功で世界のゴム供給はこの形態を採用することになった。彼の綿密な調査による経営はその後のゴム産業に大きく貢献したと評価されている。1935年1月、ニューヨークのマンハッタン・ゴム商會を引退。1943年8月4日、マサチューセッツ州Mattapoisettで他界した。

子供は娘 Isabella Ramsay (1912-2009) のみ。彼女はコロンビア大学卒業で父親譲りの調査能力を発揮、*Hardy and Hardie*の第12章の編集に協力した。その長男Edward E. Watts III氏によると、同書に記載のスペル Isabelle RamseyはIsabella Ramsayが正しく、生年も1913年ではなく1912年であるという。

XII 三男系の孫ソーントン・シャーバーン Thornton Sherburne (1876-1937)

Thorntonは3回の結婚をしてそれぞれの家族が現在につながっていることが判明した。そのため父親Arthur Sherburneの家系図は3系統作成することになった。（親子の写真を入手）

1876年11月16日、ニューハンプシャー州ハノーヴァー生まれ。初婚は1900年9月12日24歳のとき、相手はJames Carruthers Greenoughの娘 Buelah (1874-?)、再婚は1908年9月7日で、妻はAlbert B. Amesの娘

Minnie Laura (1885-1946)、3番目はRuth Stacker (?-1968)である。

ハーヴァード大学を1899年に卒業したThorntonは父親の文才を受け継いで、新聞記者や雑誌編集者として活躍した。初めニューヨークとワシントン、次にカルフォルニア、ハワイへと移り住み、それぞれ現地の主要誌に記事を書いた。1937年8月16日ハワイ・ホノルルで逝去。享年61歳。
(*Ancestors of Patricia Elizabeth Hardy*)

現在、三家族の子孫Hugh Hardy (1932-)、Harry Whitney Durand II (1942-) Lester F. Hardy (1952-) と交流をつづけている。

ⅩⅢ 四男系の孫 チャールズ・アシュレイ Charles Ashley (1874-1929)

1874年11月6日、四男Edward Eldridgeの長男として誕生。新島が見抜いたとおり生真面目な努力家で、ハーヴァード大学を1897年に卒業、7年後の1904年にはマサチューセッツ工科大学の鉱山工学科を卒業している。父親の血筋がスポーツ万能で、ハーヴァード在学中には射撃チームのキャプテンをつとめ、有名なハンター2人とコロラドでふた冬を過ごしたという。鉱山関係のビジネスにも興味をいだき、MITを卒業する前の夏にはCharles J. Paine大将 (1833-1916) の率いるアラスカ石炭鉱脈調査団に同行した。

メキシコへも友人と石炭探査にでかけ、のちに鉱山会社Moody, Hardy and Harringtonを設立している。会社解散後もメキシコにのこり大規模な牧場経営(父親Edwardの夢が想起される)に乗りだしたが、やがてメキシコ戦争に巻き込まれ閉鎖の憂き目にあった。その間、メキシコ・ソノラ郡の領事代理を務めている。

祖父の出身地であったため、少年期からチャタムをこよなく愛しクルーディングを楽しんだ。メキシコから帰国すると、チャタムの歴史的建物の保存活動にのりだす。いくつかの建物がマサチューセッツ州歴史的建造物として登録されたあとも、中心人物として活躍した。また、新しいスポーツの興隆にもつとめ、チャタムに本格的なゴルフコースをオープンさせている。また、音楽や美術の愛好家としても知られ、フランス、スペイン文学

を愛読する熱心な読書家でもあった。

1899年3月3日25歳でAlice Eliza Adams (1875-1953)と結婚、4人の子供Edward (1900-1917), Virginia (1902-1987), Allison (1909-1987), Charles (1910-1973)にめぐまれた。1929年11月29日逝去。享年55歳。長男が17歳で死亡しているため、ハーディー夫妻の遺品等は末っ子のCharlesに受け継がれ、現在その長男が所有している。

XIV 現代につながる子孫たち

過去3年間に様々な方法で8名の子孫の知遇を得ることができたが、なかに自分の系譜を詳細に記録していた歴史の大学教授やハーディー系譜に関心のある子孫がいて大いに助けられた。なお、現在生存している子孫の情報は個人情報保護の対象になるため、関係子孫から予め公表許可を得ていることを明記しておく。公表不許可の場合はフルネームでなくChild 1, Child 2などと表記した。以下、新たに作成した家系図をひらき、ハーディー系譜のどの位置にいる子孫なのかを確かめながら読むと分かりやすいかもしれない。

1 長男Alpheus Holmes Hardy系統

- (1) Edward Everett Watts III (1943-) 67歳、ボストン在住の弁護士
- (2) Edward Alpheus Boileau (1968-) 42歳、ロンドン在住の日本語教師
- (3) Charles Adams Platt II (1932-) 78歳、ニューヨーク在住の建築家
- (4) Nicholas Platt (1936-) 74歳、ニューヨーク在住の元外交官

2 三男Athur Sherburne Hardy系統

- (5) Hugh Gelston Hardy (1932-) 78歳、ニューヨーク在住の建築家

(6) Harry Whitney Durand II (1942-) 68歳、テネシー州在住の弁護士

3 四男Edward Eldridge Hardy系統

(7) Charles Ashley Hardy III (1951-) 59歳、ペンシルバニア州在住の大学教授

(8) Eliza Hardy Jones (1980-) 30歳、フィラデルフィア在住の女性音楽家

大学教授のCharles Ashley Hardy III氏は、メールのやりとりのなかで新島にたいするハーディー氏の忠告について（『新島襄宛英文書簡集（2）』未定稿 p.434, 1885.11.10）、次のような感想をよせてくれた。

I especially like Alpheus's advice to "be wise and reticent as to theological questions--remember that great theologians are rarely great or even useful preachers." Sounds like very practical counsel. (2010-5-13 メール受信)

「私はアルフィーアスの忠告のこの部分が気に入っています。『神学的な質問にたいしては賢く無口でいるほうがいい。偉大な神学者がほんとうに偉大で有益な伝道者になれるのは稀だということをよく肝に銘じておきなさい。』いかにも現実的な忠告です。」

教授は代々伝わる新島から贈られた彫金入り真鍮製の壺一對や貴重な写真を多数保管していた。娘のElizaは弁護士と結婚しフィラデルフィアでプロの音楽家として活躍、息子Nathanielはオーストラリアのプリズベンで昆虫学者をしている。

Hugh Hardyは登録建築家の2%弱にしか授与されないFAIA (Fellow of the American Institute of Architects) の称号をもつ建築家である。大学、劇場、教会など受賞歴のある多数の建築に携わっており、ニューヨーク植物園のVisitor Center も氏のデザインである。

同じく、Charles A. Platt IIもFAIAをもつニューヨークの建築家で本も出版している。彼の祖父は同名の著名建築家で、ワシントンD.C.の東洋美術で有名なフリーア美術館建設やPhillips Academyのチャペル、美術館を

建設しキャンパス再編も主導した。

従弟のNicholas Plattは著名外交官で、米中関係改善のためのニクソン派遣団に同行している。本年3月、その経緯を記した回顧録“China Boys”を出版、そのなかで外交官への志望動機として先祖が新島や同志社と関わっていたことを挙げている。また、1975年の創立100周年に際し同志社に招待され、父親Geoffreyと一緒に大歓迎されたことを告白している。(同書 pp.4-6, 30, 223) 二男のOliverはエミー賞に何回かノミネートされた俳優、三男Nicholas Jr.はNew York Magazineのレストラン担当記者。母親Helen Choateは、先のJ. Montgomery Searsの妻Sarah Searsと縁続きであることも判明した。

Edward Alpheus Boileauはオックスフォード大学で日本語を学び現在ロンドンで日本語を教えているが、2年間日本で働いたこともあり個人的に同志社を訪れている。叔父のEdward Everett Watts IIIはプリンストン大学出の弁護士でマサチューセッツ州Dedhamに住み、Phillips Academyに良心碑を建立したとき除幕式に出席したと明かしてくれた。娘のHilaryも日本で働いたことがあり現在ベトナムに住んでいる。祖母Isabella Ramsay (2009年6月27日逝去)の言い伝えによると、新島が家族の子供たち(誰かは不明)に船の扱い方やJuggling(お手玉?)をよく教えてくれたという。

Harry Whitney Durand IIはテネシー州南東部のChattanoogaで弁護士を開業、直系ではないが母親Patricia Elizabeth Hardyの系譜情報を提供してくれた。

おわりに

子孫はハーディー夫妻の代から数えて6世代目に入り世界各地で活躍している。今回の系譜調査や8名の子孫たちとの交流をとおして、それぞれの子孫が祖先を想い新島や同志社とのつながりに誇りをもって生きていることを知った。また、ハーディー夫妻の肖像画、写真、遺品などを言い伝えとともに大切に受け継いでいることも明らかになった。

5年後には同志社創立140周年の節目の年をむかえる。そのとき、子孫の何人かを招いて同志社発展のすがたを見てもらうことは可能だろうか。おそらく、現在交流している子孫の多くがハーディー夫妻のことを語る最後の世代であるように思われる。

「アルフィーアス・ハーディーの系譜

～祖父ジョシアの代から現代につながる子孫まで～」の参考資料

○参考文献

- 1 H. Claude Hardy and Rev. Edwin Noah Hardy, *Hardy and Hardie, Past and Present*, The Syracuse Typesetting Co., Inc., New York 1935; Reprinted by Higginson Book Company, Salem, Massachusetts 2008 1322 pages
- 2 Joseph Hardy II, *A Record of One Hundred Years of the Hardy family*, Chatham, Massachusetts, Personal edition 1877
- 3 Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, Houghton, Mifflin and Company, Boston and New York, The Riverside Press, Cambridge, Massachusetts 1892
- 4 Charles Ashley Hardy III, *The Hardy Chronicles*, Personal edition 2010
- 5 Charles Adams Platt II, *The Hardy family*, Personal edition 2010
- 6 Simeon L. Deyo, *History of Barnstable County, Massachusetts, Chapter XIX Town of Chatham*, H. W. Blake & Co., New York 1890
- 7 *Wisconsin Evangel*, Number 9, August 1893
- 8 Allan Forbes, *Some Merchants and Sea Captains of Old Boston*, Walton Advertising & Printing Co., Boston, Massachusetts 1918 初版
- 9 Allan Forbes, *Other Merchants and Sea Captains of Old Boston*, Walton Advertising & Printing Co., Boston, Massachusetts 1919 初版
- 10 Joseph A. Nickerson Jr. & Geraldine D. Nickerson, *Chatham Sea Captains in the Age of Sail*, The History Press, Charleston, South Carolina 2008 初版
- 11 Octavius T. Howe and Frederick G. Mathews, *American Clipper Ships 1833-1858, Volume I*, Dover Publications, New York 1986
- 12 Octavius T. Howe and Frederick G. Mathews, *American Clipper Ships 1833-1858,*

- Volume II*, Dover Publications, New York 1986
- 13 Frances Diane Robotti, *Whaling and Old Salem*, Bonanza Books, New York 1962
 - 14 Susan J. Montgomery and Roger G. Reed, *Phillips Academy Andover*, Princeton Architectural Press, New York 2000
 - 15 Frederick H. Hitchcock, *The Handbook of Amherst*, The History Press, Charleston, South Carolina, First published 1891, The History Press edition 2007
 - 16 Daniel Lombard, *Amherst and Hadley through the Seasons*, Arcadia Publishing, Charleston, South Carolina 1998
 - 17 Jim Vrabel, *When in Boston, A timeline & Almanac*, Northeastern University Press, Boston 2004
 - 18 Mary Melvin Petronella, *Victorian Boston Today*, Northeastern University Press, Boston 2004
 - 19 Peter Duus, *The Japanese Discovery of America*, A Brief History with Documents, Bedford Books 1997
 - 20 Gerald Friedman, *State-Making and Labor Movements*, University Press, Cornell University, New York 1998
 - 21 Nicholas Platt, *China Boys, How U. S. Relations with the PRC Began and Grew, A Personal Memoir*, New Academia Publishing, VELLUM books 2010
 - 22 Platt Byard Dovell White, *Architecture on Architecture*, The Monacelli Press, New York 2007
 - 23 Erica E. Hirshler, *A Studio of Her Own, Women Artists in Boston 1870-1940*, MFA Publications, Boston, Massachusetts 2001
 - 24 [http://fourfamilyhistories.com/Hardy/Patricia Elizabeth Hardy Ancestors.pdf](http://fourfamilyhistories.com/Hardy/Patricia%20Elizabeth%20Hardy%20Ancestors.pdf)
Patricia Elizabeth Hardy 2009-6-3
 - 25 [http://fourfamilyhistories.com/Durand/Harry Whitney Durand III Ancestry.pdf](http://fourfamilyhistories.com/Durand/Harry%20Whitney%20Durand%20III%20Ancestry.pdf)
Harry Whitney Durrand III 2009-6-12
 - 26 <http://www.lighthouse.cc/chatham/history.html>
Jeremy D'Entremont. *Chatham Lighthouse History* 2009-7-20
 - 27 <http://www.trussel.com/kir/mstar.htm>
Albert S. Baker: *Morning Stars and Missionary Packet* 2009-8-17

- 28 http://www.norfolkhistorical.org/insights/2001_spring/nightmare.html,
The Norfolk Historical Society, *Norfolk's Worst Nightmare*, 2009-11-23
- 29 新島襄全集編集委員会『新島襄全集』全10巻、同朋舎出版 1985
- 30 同志社社史資料室（センター）編『新島研究』第82号－第99号、1993-2008
- 31 同志社社史資料室（センター）編『同志社談叢』第17号－第28号、1997-2008
- 32 北垣宗治著『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1933
- 33 北垣宗治編『新島襄の世界 永眠百年の時点から』晃洋書房 1990
- 34 ポール・F・ボラー著、北垣宗治訳『アメリカンボードと同志社 1875-1900』新教出版社 2007
- 35 井上勝也著『新島襄 人と思想』第3章 新島襄の恩人ハーディー 人と生涯、晃洋書房 1990
- 36 新島襄編集委員会『新島襄』あさを社 1994
- 37 河野仁昭著『新島襄への旅』京都新聞社 1993
- 38 吉田磯二著『わが生涯の新島襄 森中章光先生日記』不二出版 1991
- 39 阿部正敏編著『新島襄とアメリカ』大学教育出版 2001
- 40 『現代語で読む新島襄』編集委員会『現代語で読む新島襄』丸善 2005

○添付資料1-6（ハーディー氏息子別家系図6種別掲）

家系図作成にあたっては、参考文献のほかに、子孫作成の系図資料、世界最大の系譜資料を公開する有料検索サイトAncestry.comとFootnote.com、国勢調査原簿、卒業大学図書館、出生地および埋葬地の歴史協会、博物館、公共図書館、教会、New York TimesやBoston Daily Globeの新聞記事アーカイブス等を参照した。これらの調査結果は全てこの家系図6種に反映されている。

○添付資料-7 Alpheus Hardy & Co. 所有船リスト

所有船18隻のうち、Daniel Webster号は後にボストン〜リバプール・ロンドン間の定期船として活躍した。船の大きさについては、Wild Rover号も含め半数の9隻が判明した。

- 1 Otho (150 tons)
- 2 Conquest

- 3 Ocean Pearl (847 tons), build at Charlestown, Mass, in 1853 by Joshua Magoun
- 4 Cowper
- 5 Granite
- 6 Wild Rover (1100 tons, old measurement; 1036 tons, new measurement)

The medium clipper ship was built at Damariscotta, Maine, in 1853 by Austin & Hall and owned by Alpheus Hardy & Co. until about 1869, when she was purchased by J. C. Nickels. She was of quite sharp model and was called a smart ship. Prior to 1869 her captains were Thomas Crowell, Benajah Crowell, Jr., Thomas Sparrow and Horace S. Taylor. Cap. Charles R. Null was her last commander.

- 7 Young Greek (462 tons)
- 8 Mountain Wave (708 tons), launched at Charlestown, Mass, in 1852 by Joshua Magoun
- 9 Kepler
- 10 Cleber
- 11 Gazelle (1244 tons), launched at New York in 1851 by William H. Webb
- 12 Turk
- 13 Bounding Billow
- 14 Daniel Webster (1545 tons), built at East Boston in 1850 by Donald McKay
- 15 Dorchester
- 16 Young Turk (320 tons)
- 17 Young Turk, 2nd
- 18 Radiant (1318 tons), launched at East Boston in 1853 by Paul Curtis
(*Some Merchants and Sea Captains of Old Boston* 1918 p.24 and *American Clipper Ships 1833-1858, Volume I and Volume II*, 1986, pp. 220-221, 371, 455-456, 468, 496-498, 709-710)

○添付資料-8 遺品大理石像

新島もよく鑑賞していたというこの等身大の大理石像は、ハーディー氏の遺品でイタリア人彫刻家 Rinaldo Rinaldi (1793-1873) によって作られた。

1904年、長男Alpheus Holmesにより Wellesley Collegeに寄贈されたが、大学美術館学芸員 Ian Graham氏によると、1914年の火災により損壊してしまったという。

説明には、The Wise and Foolish Virgins, A statue by R. Rinaldi made in 1860 for Mr. Alpheus Hardy, of Boston, and recently presented to Wellesley College. とある。

しかし、この説明にハーディー氏が注文して制作したように書かれているが、実際には「イタリアで3,000ドルを払って買い求めたもの」であった。(北垣名誉教授教示)



THE WISE AND FOOLISH VIRGINS
A statue by R. Rinaldi made in 1860 for Mr. Alpheus Hardy, of Boston, and recently presented to Wellesley College.

このテーマは、マタイ福音書25節1 - 13章にでてくる寓話がもとになっている。本来は5人の賢い娘と5人の愚かな娘の話である。暗闇のなか聖人を迎えに行く約束であったが、愚かな者たちはランプの油を忘れ賢い者たちに油を分けてくれるよう頼み込む。しかし、余分な油がなく分けて貰えず、愚かな者たちは聖人の出迎えに行くことができなかった。

この像では手を差し伸べ油を乞う乙女が foolishで、ランプを手で被う乙女が wiseとなる。ヨーロッパの教会にはこのモチーフで多数の大理石像や壁画、ステンドグラスが遺されている。この点から推測できることは、ハーディー氏は審美的な嗜好よりもむしろ宗教的な啓発をこの像から読み取り戒めとしていたのだろうか。



○余録-1 Wild Rover号

この原画は現在ChathamのAtwood House Museumに保管されているが、過去に二度ほど同志社で公開されたことがある。この絵の所在を苦勞して見つけ出したのは、三男 Arthur Sherburneの孫Gelston Hardyであった。

(北垣宗治名誉教授調査、Atwood House Museum提供)



*Chatham Sea Captains in the Age of Sail 2008*に掲載。新島襄に関する説明を付記。
The ship *Wild Rover* brought Neesima Shimeta to Boston to “embrace Christianity” and to learn about America so he could bring needed reforms back to his country.
(*Joseph A. Nickerson, Jr. Collection*)



[26] SHIP "WILD ROVER" OF BOSTON, 1035 TONS, BUILT AT DAMARISCOTTA, ME, IN 1853.
From a Chinese painting showing the ship at Hong Kong, Dec. 2, 1864.

[767] SHIP "WILD ROVER" OF BOSTON, 1035 TONS, BUILT AT DAMARISCOTTA, ME, IN 1853 From a Chinese painting showing the ship at Hong Kong, Dec. 2, 1864.

中国人が描いた絵画で、新島襄がキャビン・ボーイとして乗船を許された年の12月2日に香港で描かれた。(George Daley 提供)

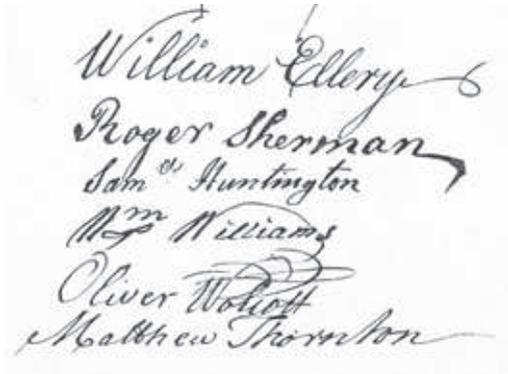
○余録-2 ハーディー家男性の容貌

調査の過程で、ハーディー家の男性(四男は不明)のみパスポート原簿が見つかった。当時パスポートに写真の掲載がなかったから、本人確認はこれらの記載事項で行われた。以下に確定した各人の生没年とともに紹介する。なお、同行した妻はaccompanied by his wifeとあるだけで生年、容貌に関する記載はない。

	Alpheus	Alpheus Holmes	Charles Francis	Arthur Sherburne	Edward Eldridge
生没	1815 - 1887	1840 - 1917	1843 - 1911	1847 - 1930	1850 - 1903
享年	72	77	68	83	53
身長	178.3 cm	174 cm	183 cm	169 cm	
髪色	濃い茶 dark brown	明るめ light	茶色 brown	茶色 brown	
眼	ブルー blue	ブルー blue	ブルー blue	灰色 grey	
鼻	ローマ鼻 Roman	普通 regular	高め prominent	わし aquiline	
口	小さめ small	小さめ small	ほどほど medium	ほどほど medium	
顔	ふくよか full	普通 regular	瓜実顔 oval	瓜実顔 oval	

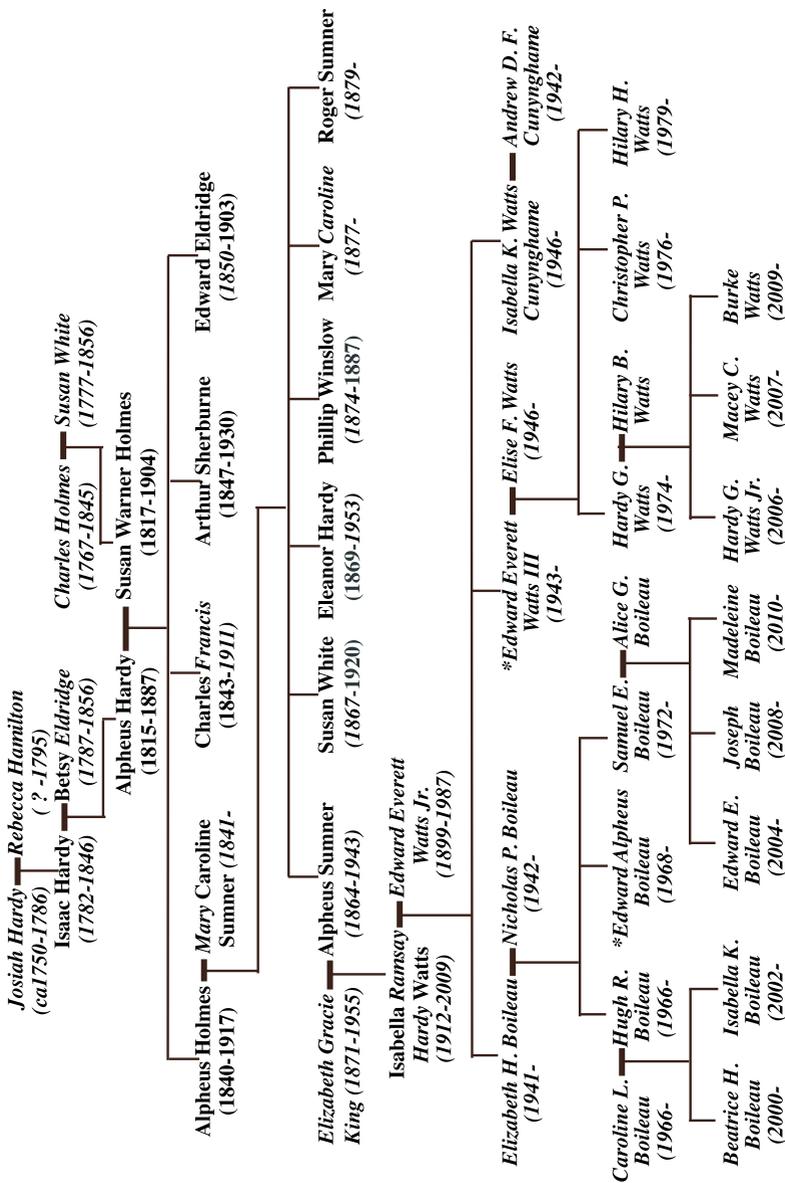
○余録-3 Arthur Sherburneの妻の祖先

Matthew Thornton (1714-1803) はアイルランド出身で3歳のとき家族とともに移住。植民地ニューハンプシャー議会の初代議長を務め、アメリカ独立宣言書に署名した植民地(州の成立は1788年)代表3名の1人である。後に州の最高裁判事に任命された。



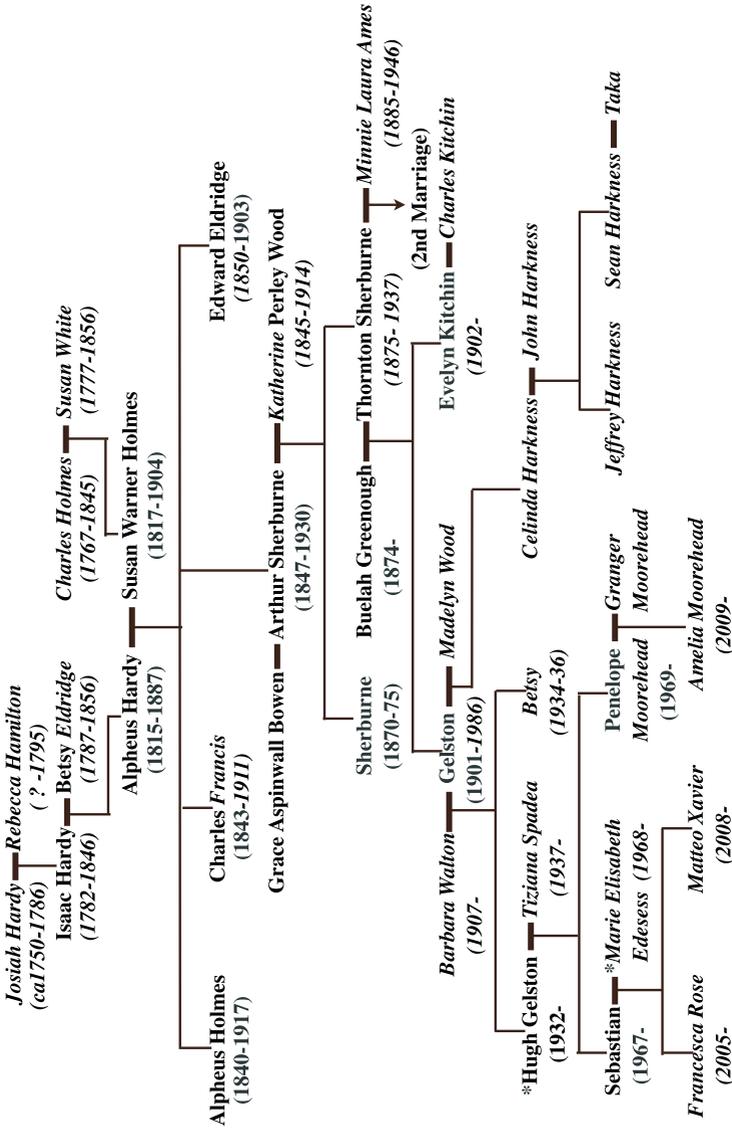
資料1 Family Tree of Alpheus Holmes Hardy(1)

長男系図(1) (全集掲載の修正及び追加情報はイタリック体、情報提供者は*で表示)



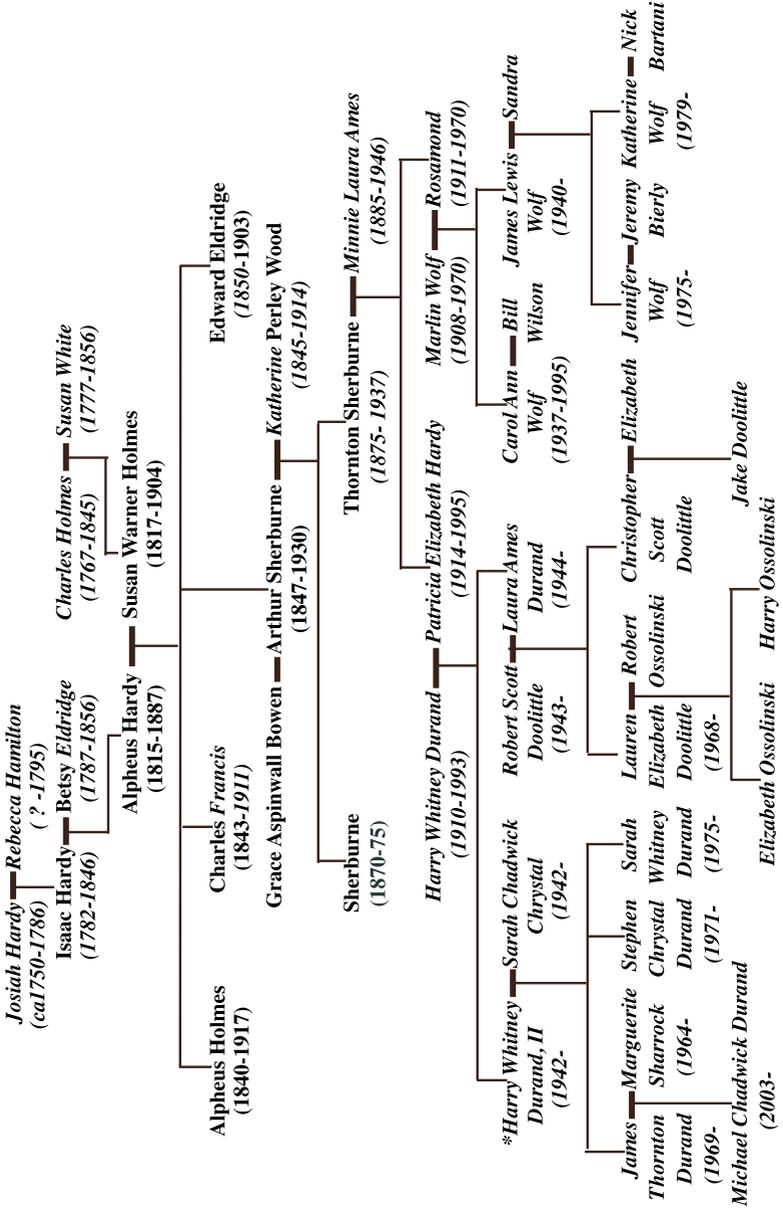
資料3 Family Tree of Arthur Sherburne Hardy(1)

三男系図(1) (全集掲載の修正および追加情報はイタリック体、情報提供者は*で表示)



資料 4 Family Tree of Arthur Sherburne Hardy(2)

(全集掲載の修正および追加情報はイタリック体、情報提供者は*で表示)



資料5 Family Tree of Arthur Sherburne Hardy(3)

三男系図(3) (全集掲載の修正および追加情報はイタリック体、情報提供者は*で表示)

